

## 令和7年度スポーツ功労者（プロスポーツ分野）功績概要一覧

氏名【競技名】	生年月日	功績概要
<small>かざま しんじ</small> <b>風間 深志</b> <b>【モーターサイクルスポーツ】</b>	1950 年 9 月 26 日 (75 歳)	<p>風間深志氏は、バイク冒険の先駆者として、1985 年にエベレスト登攀で高度 6,005m に到達し、バイクによる世界最高高度記録を樹立。1987 年には北極点、1992 年には南極点にバイクで到達し、いずれも人類初の快挙を達成。これらの挑戦は、モーターサイクルの可能性を広げ、自然との共生や挑戦の意義を社会に示す象徴的な活動であった。1982 年には日本人初のパリ・ダカールラリー参戦・完走を果たし、国際舞台で存在感を示した。</p> <p>1988 年から「地球元気村」を主宰し、自然体験を通じた人づくり・地域づくりに尽力。障害者との日本縦断駅伝や震災支援など、バイクを通じた社会的実践にも取り組み、教育・福祉分野でも継続的に貢献。</p> <p>2023 年には女性限定の「MOTHER LAKE RALLY（マザーレイクラリー）」を初開催し、女性ライダーの文化醸成と地域交流を促進。</p> <p>2013 年創設の「SSTR（サンライズ・サンセット・ツーリング・ラリー）」は、日本最大級のツーリングイベントとして定着し、毎年石川県千里浜をゴールに開催。（2024 年には 14,500 台が参加し、過去最大）</p> <p>2024 年・2025 年は「令和 6 年能登半島地震」の復興支援を主題に掲げ、地域との連携を深めた。</p> <p>風間氏は、モーターサイクルスポーツを通じた社会貢献の象徴であり、スポーツ功労者として極めてふさわしい人物である。</p>
<small>くすのき じゅんいちろう</small> <b>楠 潤一郎</b> <b>【競技ダンス】</b>	1966 年 3 月 26 日 (59 歳)	<p>現役選手時代は全日本ラテンチャンピオンのタイトルを獲得するなど日本のトップ選手として国内外の大会で活躍、日本代表（1 カ国 2 組）として世界選手権にも出場した。</p> <p>選手引退後はイギリスの 3 大タイトルであるユナイテッドキングダムチャンピオンシップス、ロンドンインターチャンピオンシップスで長年審査をするなど国内外の大会で審査員として活躍、また、公益社団法人日本ダンス議会理事長に就任、10 年間同法人及び社交ダンス業界発展のために尽力、理事長退任後は名誉理事長となる。</p> <p>また、現役選手時代からコーチャーとして後進の指導と幅広く活動しプロ全日本チャンピオンを輩出した。</p>

氏名【競技名】	生年月日	功績概要
<small>くらもと まさひろ</small> 倉本 昌弘  【ゴルフ】	1955 年 9 月 9 日  (70 歳)	<p>アマチュア時代にツアー競技である中四国オープンに優勝(1980 年)、日本アマ 3 勝、高校時代に全日本ジュニアチャンピオン、大学時代には日本学生選手権 4 連覇を達成するなど輝かしい戦績を残し 1981 年にプロ転向(PGA 入会)。</p> <p>プロ初年度から年間 6 勝を挙げ、賞金ランキング 2 位に入る。日本プロゴルフ選手権大会 2 勝を含むレギュラーツアー通算 30 勝の永久シードプレーヤーとして、現在もレギュラーツアー、シニアツアーの現役選手として活躍している。</p> <p>また、1982 年の全英オープンでは日本人選手過去最高の 4 位タイに入るとともに、米国の PGA ツアー、シニアツアーにも参戦するなど海外でも活躍。</p> <p>現在もフル参戦しているシニアツアーでも通算 9 勝、2 度の賞金王に輝くなど選手としての活躍に加え、2014 年に現役選手として初の日本プロゴルフ協会会長に就任し 2022 年 3 月に退任するまで、ゴルフ界の発展、普及・振興に大きく貢献するとともに、現在も日本ゴルフツアー機構の副会長としてゴルフ界の第一線で活躍し続けている。</p>
<small>せきや まさのり</small> 関谷 正徳  【モータースポーツ】	1949 年 11 月 27 日  (76 歳)	<p>同人は、自動車販売ディーラーに勤務する傍ら、1972 年に四輪レース競技に初出場。80 年代にかけて優勝を含む好成績を国内レースで収めた。</p> <p>1982 年に初めて渡英し、イギリス国内レースシリーズに参戦。海外の強豪を相手に出場した 6 戦中 5 戦で上位入賞を果たした。</p> <p>7～80 年代にかけて国内レースでトップクラスの成績を残す一方、1985 年にはフランスで毎年開催される世界最高峰の耐久レース「ル・マン 24 時間レース」に初めて出場。1995 年には同レースにおいて日本人として初めての総合優勝を飾り、その功績を称えて四輪モータースポーツの国内統轄団体である一般社団法人日本自動車連盟(JAF)より「JAF モータースポーツ功績賞」が授与された。</p> <p>2000 年をもってレーシングドライバーを引退。その後はレーシングチームの監督を務める一方で、若手トップレーサーを育成するレーシングスクールの校長を歴任。指導者として日本を代表する多くのレーシングドライバーを育てあげた。</p> <p>また競技会運営者としては、2017 年に参加者を女性限定としたレースシリーズ「KYOJO CUP」をプロデュースし、日本のレース文化に新たな価値観をもたらす意義深い取り組みを始めた。この取り組みを受けて、2025 年には国連が後援する第 9 回国際女性デー HAPPY WOMAN FESTA 2025 にて「女性応援ブランド賞」を受賞した。</p> <p>2022 年にはラリー競技における世界最高峰の国際大会(WRC ラリージャパン)の日本大会において、競技運営側の組織委員長を務めた。</p> <p>業界への貢献としては、2021 年から現在まで国内四輪モータースポーツを統轄する一般社団法人日本自動車連盟(JAF)において、競技規則を制定する JAF モータースポーツ審議会で委員を務めるなど、日本のモータースポーツ文化の振興および発展と次世代育成に大きく貢献した。</p>

氏名【競技名】	生年月日	功績概要
<small>よしなが かずみ</small> 吉永 一美 【相撲】	1959 年 4 月 3 日 (66 歳)	<p>昭和 50 年 3 月場所初土俵(君ヶ濱部屋、後の井筒部屋に入門)。平成 2 年 5 月場所新大関、平成 8 年 3 月場所力士引退。平成 22 年 2 月理事(令和 6 年 3 月までの期間で累計 3 年 2 か月)。令和 6 年 4 月参与。</p> <p>同人は、力士霧島としては軽量で恵まれない体格であったが、厳しい稽古とウエイトトレーニングで、「和製ヘラクレス」と呼ばれるほどの 186 センチ、130 キロの筋骨隆々の体格を築き上げた。努力の末、30 歳 11 か月、初土俵からの所要 91 場所という史上最スロー出世記録で大関に昇進、優勝 1 回を果たし横綱に近づいた。</p> <p>引退後は陸奥部屋の師匠として弟子の育成に力を注ぎ、2 代目の大関霧島を育て、師匠として横綱鶴竜を指導した。</p> <p>その一方、日本相撲協会の理事を務め、事業部長として理事長を補佐し、コロナ後の相撲界隆盛の基礎を築き、発展に尽力した。また、鹿児島県霧島市の大使になるなど地域振興に努め、霧島市より特別表彰を受けている。</p>

※ 各団体から提出のあった推薦調書に基づき作成。